

フライディの口をジェンダー化／性化(セクシュアライズ)する — 『アメリカの中国人』における身体性の書き直し地図 —

和 泉 邦 子

『チャイナタウンの女武者』(以下、『女武者』)で、中国系移民の母と娘の物語を書いたキングストンは、その対の物語である移民の父たちの物語、を「ポリネシアの半神半人のトリックスター(122)」の語り口で織り上げていく。その語り口は、西欧キリスト教文化への帰依を内面化したモデル・マイノリティとしてのアジア系アメリカ人の位置をずらし、「半神半人」というファンタスティックな位置から、西欧文化の神の権威に疑義を唱えていくことを目論むトリックスターのものである。『女武者』の語りで登場した、奇妙な「猿のフィギュア」は、¹『アメリカの中国人』において、ジェンダーの二分法と混交され、「半人前の猿」+「半男／半女」²という、ハイブリッドなものへと再配備されている。アメリカ主流文化が移民の父たちの自己イメージを歪曲させたレイシズム政策としての外枠物語(去勢化=Emasculation)と中国伝統家父長制とアメリカ・ブルジョア核家族制の双方に連結されていくセクシズムとしての内枠物語(ドメスティック化=Domestication)によって、³二重の差別を被る移民の娘の位置から、「正義」を体現してこなかったアメリカの法をパロディー化するトリックスターの語り口。それが、「半人前の猿」+「半男／半女」と表象される位置からの語り口である。

『女武者』の語りの息苦しさと異なり、“a half-and-half”と表象される位置から中国の父たちの物語を語る娘の語り口は、レイシズムとセクシズムの双方への批判のスタンスを自在に変化させ、一定の距離を置いた余裕さえ感じられる。『女武者』において、「叔母さんの話」が内包するモラルを説く母の教えは、少女期のキングストンを「十八ヶ月の原因不明の病気(232)」で寝込ませる程、強烈な抑圧力を女の身体へ行使し続けた。「叔母さんの話」で最初に提示された「女」とそのセクシュアリティの問題、ことに、女の身体性とその再生産能力を父系家族内に統一して意味づけようとする家父長制の力(中国とアメリカの双方に作用する)から逃れることの困難さは、大人の女になろうとする時期に、少女期とは別の次元で、ジェンダー／セクシュアリティの問題を「身体」に再刻印しているからである。女の身体性へとヒステリカルに閉じ込める抑圧力から逃れることの困難さは、『女武者』という一つの物語内部で最終的に解消されることはないように見える。「母と娘の内枠物語」において、解消され難い問題であったジェンダー／セクシュアリティは、しかしながら、『アメリカの中国人』において、男の身体的拘束の外枠物語についての語り手となる時、その身体位置の違いによって距離が生じ、トーンの差が生まれている。キン

グストンは、中国伝統文化におけるセクシズムの象徴である「纏足イメージ」を、アメリカ文化におけるレイシズムに苦しむ中国の父たちの身体的拘束物語に再利用して、身体性の書き直し地図を描いていこうとしており、「父の物語」を語り直す「娘の語り」の試みの中で、そのトーンの差を生じさせている。

本稿では、中国伝統文化の「性／ジェンダー拘束物語（纏足）」を再利用した、キングストンによる中国移民の祖父たちへの身体拘束物語（エスニシティ拘束）の書き直しを、＜1＞法の位置の脱構築、＜2＞科学の位置の脱構築、＜3＞アメリカ的男性性の位置の脱構築－ベトナム戦争に行った弟の話－の三点から考察していきたい。そのプロセスにおいて、エスニック・グループにおける、アメリカ人としての「ナショナル・アイデンティティ（男性性）」獲得（の失敗の）物語は、キングストンによって、いかに身体性が再配置（remapping）され、「エスニシティ／ジェンダー」カテゴリーの絡みが戦略的に再利用されながら書き直されていくのかを問うてみたい。

＜1＞ 法の位置の脱構築

(1) 自由の国アメリカへの捕囚の旅－囚われのチャイナマン物語と「タン・アオの子宮という誤表象」

＜鏡の中の逆転の構図－シュガー／アヘン／クリスチャン改宗という洗脳物語＞

キングストンは、アメリカの父たちの物語の書き出しを「発見について」と題し、「金山」を探す旅に出たタン・アオが迷い込んだ「夢の国」を鏡の中の逆転の世界として寓話化している。この逆さまな世界は、「女の国」と呼ばれて「王様ではなく、女王様が支配する国」であり、タン・アオは、この「女の国」で「化粧道具と鏡と女の衣装が置かれた天蓋のついた部屋」に幽閉され、「靴を脱がせられて足枷」をかけられる。「二つの唇は縫い合わされ」「足に布を巻き付けられ」「女のたべもの」を与えられ、「彼の体内に女性的な冷風」をそよがせられて、ついにタン・アオは、「彼の子宮'His womb'(12)」を持つことになる。「子宮を持つことになった彼」は、「形を変えられてしまった足」のために、「足の布をほどこうとしても、縮んでしまった血管の痛みを耐えかねて、二人の捕囚人に「足にふたたびきつく布を巻いて欲しいと懇願する」しまつである。

この「タン・アオの子宮」という＜誤表象＞に明白なことは、「金山に旅した中国の父たちが受けた人種差別としての身体拘束の物語（エスニシティによる拘束）」と中国伝統文化における性差別の風習としての「纏足イメージ（ジェンダー拘束）」が意図的に「交換」されていることである。しかし、「エスニシティ」と「ジェンダー」は単純な対称的關係にはならない。「子宮を持つ男」という＜誤表象＞は、アメリカ主流社会によって、中国系男性の労働力がアメリカ鉄道建設などに利用されたにもかかわらず、女性の入国は厳しく制限され「いびつな」独身男性社会の形成を余儀無くされたことなど、中国の父たちの苦難に満ちた「歴史」のトラウマ的記憶を呼び起こし、さらには、中国伝統文化の性差別への批

判も語るものとなっている。したがって、この〈誤表象〉は、「国境」を越えることで人種差別にある「父たちの物語」と、国の移動に関わりなく性差別を、そして移動によって人種差別にあう「女たちの物語」を相互に指し示すものとなっている。これによって浮かび上がるのは、世代を越えて温存される性差別とナショナル・アイデンティティの構築に関わる人種差別が、時間軸と空間軸を交差させながら、個人の身体というマイクロな場にマクロな国家の配置を刻み込む両義的意味づけである。覇権文化によって、周辺化させられていた中国系移民の曾祖父たちの物語とは遠く隔てられ、三重の周縁化を余儀無くされる（孫）娘の位置から、キングストンは、「エスニシティ」「ジェンダー／セクシュアリティ」の関係性を意図的に逆転させ、ずらし、振じれさせ、重ね合わせ、それによって、父たちの物語の〈誤表象〉を、巧妙に、ジェンダー化／性化（セクシュアライズ）させ、前景化させていったのである。

アメリカの父たちの物語の語りにおいて、「ジェンダー／セクシュアリティ」を前景化する工夫とは、第一に、アメリカという国自体を女王として表象すること。第二に、アメリカン・ドリームを女王による「甘い誘惑物語」として、ラヴ・ロマンス化すること。第三に、中国の父たちの物語を女王として表象されるアメリカン・ドリームの「甘い誘惑」に洗脳され、腑抜けにされ「去勢化」された姿として描くこと。第四に、「去勢化」されたチャイナ・メンこそが、戦争において、アメリカ的男性性の真正さを証明する要員として軍事的に利用されること。確認しておきたいことは、このとき、「白人男性／非白人男性」との力関係のエスニシティ問題は、「男／女」の「ジェンダー／セクシュアリティ」問題へと繰り返しずらされ、比喩化されていくことである。「白人男性」との消しがたい差異のマーキングは、「エスニック集団の男性性の証明物語」としての〈弟〉の戦争体験記において、アメリカへの同化物語が孕んでいた男性性獲得（の失敗の）物語としての痛烈なアイロニーを浮き彫りにしていく。そのアイロニーを込めたモデルには、ハイフン付きアメリカ人男性がおこなう闘いの変容を促そうとするメッセージが込められているのである。

この章において、もう一つ重要なメタファーは、「食べ物」「飲み物」「血液」など、身体を経由して循環していくものである。アメリカン・ドリームの「甘い誘惑の力」が行使されるのは、中国系移民の第一陣として、ハワイ諸島に赴き、シュガー・プランテーション労働に携わった曾祖父たちの汗と涙にまみれた労働者としての身体においてであり、その身体は、西欧列強諸国によるアジア支配の道具として使われたアヘン中毒に犯されていく。食欲・性欲・金銭欲などの多義的欲望が書き込まれる身体は、混交的な容器として、外部（の権力や人の意図）／内部が交差し合う。タン・アオの寓話における身体的拘束の物語は、浦島太郎伝説とリップ・ヴァン・リンクル伝説の書き直しの趣を呈している「死霊の愛」の章においても、アメリカン・ドリームの「甘い誘惑」に屈する男の話として反復されている。目の覚めるような美女が出してくれる食事を「骨の髄まですっかりしゃぶった(112)」旅人は、彼の家族を呼ぶこともせず、「動物園の動物のように、愛玩動物のように

食って(113)」月日を忘れていく。何世代もの移民の身体を循環する生存のための必需品としての「食べ物」「飲む物」のメタファーは、しかしながら、この一連の同化物語において、同時に「毒」をも含み込んでいる。「死について」の章に登場するツ・ツ・チュンが、「酒」と一緒に呑み込むことを命令された「三粒の白い丸薬(170)」は、彼に「幻覚」を引き起こす。そのうえ、彼の妻も「挽き肉にされ」、彼のからだも「播り鉢に入れられ挿子木で擦られて、丸めて薬に(171)」される。生存のための養分摂取のはずの行為の中に同時に含まれていた「毒」によって、「飲むこと」の主体位置が、いつの間にか「呑み込まれる」客体へと擦り替わったこの寓話は、主体から客体へと絶え間なく変換させていく、アメリカ化のプロセス（同化物語）の寓話なのであろう。中国系が近代化の波に飲まれていった過程において起こった「シュガーとアヘンとクリスチャン改宗物語」の史実は、巧みに「食べ物／飲み物」で歓待し、洗脳する美女の物語へと置き換えられ、振れの場としての身体拘束の物語を示唆していく。「エスニシティ」／「ジェンダー／セクシュアリティ」の関係性が身体において振れて把握されていく、そのトロープの場こそが、「タン・アオの子宮」という<誤表象>なのである。

(2) <アメリカの父たちの物語—フェティッシュ化されたアメリカ的男性性への置き換え>

「父たちについて」の章には、バーバにほとんど似ているが、バーバではない「父親のフィギュア」が登場し、子供たちを混乱させる。「背が高く痩身で、わたしたちの父の、ぴったりとよくからだに合う二百ドルの背広を着て(14)」「上等の革靴」をはいた「父にそっくりの後姿」は、実は、「衣装（文化的コード化）」と「生身」の関係に「ずれ」があることを示唆している。父たちは、アメリカ的男性性のコードを着て、アメリカ化された靴を履き、アメリカのユニフォームを身に纏って、スマートに近代化した身体として生まれ変わろうとしている。そのような同化物語にとって、西欧人ではないモンゴル痣は、衣装のスマートさの下に隠しておくべきマークである。そのマークは、アブジェクトされてきた屈辱的体験（The emasculation of Asian Men）を思い出させるので、出来るだけ早く記憶から葬り去るべきものである。

ただし、バーバが入国した際に「身体に加えられる検閲」の場面の象徴性は、どれだけアメリカ的男性性のコードを身に纏っても、身体へ刻印されたマークは、裸身から完全に消すことは不可能だというアメリカの「正義」という法の大前提を示している。

役人は、バーバを独房へ導き、そこで脱衣するようにといった。役人は膚に何か書き記してないかと彼の裸体をつぶさに調べ、紙片がかくされてないかと、長髪をくしけずり、衣服の縫い目や折り返しを切りほどいて調べた。(40)

この場面は、父親であるバーバが中国で受けた科挙の試験へと場をずらされ、翻訳され直

されているが、アメリカ入国に際して、中国の父たちに加えられる身体検閲を象徴するものである。逃れられない独房というスペースに閉じこめられて、身ぐるみを剥がされて受ける裸体のチェックは、アメリカ人になるというアイデンティフィケーションプロセスが、中国系男性をアメリカ的男性性のコードを身につけるように要請しながら、その実、「去勢化（女性化）」のマークを施すことを示す。そのとき、ペニスを持つ身体は、ファルスを持つものの特権的位置を指し示す記号となることに失敗し続けるフェティッシュ化されたアメリカ的男性性へと擦り替わっていく。キングストンによる意図的なずらしにおいて、このフェティッシュ化されたアメリカ的男性性は、実際には、「チキン」と呼ばれるものに成り下がることへの不安を掻き立てる。中国の父たちは、男性性を獲得する欲望に誘われながら、白人男性並みの男性性を獲得し損なうパフォーマンスを演じ続けるのである。

この身体性へのマーキングは、経済的な意味合いにおいては、「契約に署名しちゃいけない(63)」という曾祖父の警告にもかかわらず、「アメリカ-平和の国、自由の国(63)」の誘惑にはまって、「クーリー」となるプロセスを強いられていくことになる特殊性の記しである。こうして、中国系男性のアメリカ化物語は、入国と同時に、先ず「移民局鬼」の身体検閲室という独房に叩き込まれ、中国で学位という免状を持っていたはずの「学者のからだ(67)」から「労働者のからだ」へと絶え間なく、変換されていくプロセスとなる。

「皮膚」に何が書かれているか「裸」にされて調べられ、「頭蓋骨」を開けて、「脳みそ」を見せろと命令される。もちろん、このような身体性への法外な要求は、実践不可能であるし、万が一、「頭蓋骨」を開けて、「脳みそ」を見せたとしても、検査官は、自らが発見したい科学的、医学的証拠を見つけるだけであろう。アメリカへの入国検査のシーンに象徴化されている、この変換のプロセスは、「自由と民主主義の国」アメリカが、「自由（の見せかけ）」と引き替えに「従属」を強いていく逆転の構図の縮図であり、アルチュセール風に言えば、「呼びかけ (interpellation)」に応答することによって、法の前（法に従う）「アメリカ市民」が作られていく構図と言えよう。

このアメリカ化物語は、絶えず「食べ物／飲み物」の比喩で語られ、身体のあらゆる部位から侵入し、洗脳していく。このアメリカ化のプロセスは、最終的には「堆肥」や「チキンの糞」(244)と混ぜ合わされ、中国の父たちを「チキン」に仕立て上げていく。「堆肥」や「チキンの糞」と混ぜ合わされ、「チキンになる」という表象は、それ自体、エスニック集団のアメリカ化（同化）への自己努力の無効化を指し示すものであり、その表象は、『女武者』と『アメリカの中国人』に散見され、頻出する「猿のフィギュア」と折り重ねられる。これは、「自由と民主主義」の体現というアメリカ的「正義」やアメリカ人になるという同化物語のレトリックが、入口（インプット）と出口（アウトプット）において、必ずしも一致せず、むしろ、その入口と出口のエネルギー配備操作によって、「自由や正義」をあらゆる「市民」に平等に体現していない矛盾を隠蔽しつつ、そのレトリックを有効に行使し続けていることと関係する。この時、中国系移民は、マクロの次元でのアメリカの国

体 (The American Body)の必要な内部として「包摂」されると同時に、完全なアメリカ人にはなりきれないルールが書き込まれ続ける。ミクロの次元で、個々人の身体 (bodies)が、その生命体を維持するために行う「栄養分の取り込み」と「排泄行為」は、マクロの国体が必要な「養分」は「取り入れ」ながらも、「不純物」は「排泄」する時間軸上の差延をもパラレルに示し続ける。このとき、「一人前のアメリカ人」になることに成功するかどうかという問題は、賭博場でのゲームのように、各個人の運不運の問題へと置き換えられて把握されていく。或いは、ショシャーナ・フェルマンが『語る身体のスキャンダル』で分析したように、アメリカン・ドリームの約束はパフォーマンスに演じられていく。⁴

この操作こそ、白人の男性であれば優先的に開かれている政治的・経済的特権へのアクセスへの道が、中国系男性には、達成し損なうプロセスとして「女性化」(‘Feminization of China Men’) されたり、「去勢化」(‘Emasculation of China Men’) されて表象されるものである。それは同時に、白人男性性との(獲得され損なう)距離を示し続けるものでもあろう。

(3) < (孫) 娘が曾祖父／祖父／父 (Bahba/Ed)の抑圧された沈黙の声を聞く—コミュニケーションの再構築>

「曾祖父／祖父／父」たちの「屋根裏」…<「去勢化」された男性エネルギーの空費> アメリカ的男性性の衣装の下に隠された被抑圧の記憶は、屈折した自己抑制の沈黙やフラストレーションからくる怒りの転嫁となって、ときおり発散される。その「沈黙」や「怒り」へと屈折転嫁された声は、父たちと娘とのコミュニケーションをしばしば困難にさせてきた。アメリカ化された靴を履き、モダン化された孫息子には、祖父の位置が見えず、ゴーストの声が聞こえない。アブジェクトされてきた屈辱体験 (The emasculation of Asian Men)を出来るだけ早く記憶から葬り去り、スマートなアメリカのユニフォームを身に纏って、近代化に乗ろうとする姿勢。そのような姿勢からも抑圧されていくゴーストの声を掘り起こし、自らのルーツ探しの再記憶と対抗コミュニティ再形成のための力としようとするのは、アメリカ的男性性の完璧なコピーを造るのに精一杯な(孫)息子ではない。むしろ、三重の周縁化によって、完璧な模倣を構築しようとする努力の空虚さに気づくことがより容易な位置にある(孫)娘による歴史の再構築の試みである。

白人女性フェミニストがジェンダー抑圧の記号として用いた「屋根裏部屋」⁵は、キングストンにおいて、ジェンダーとエスニシティの両方の抑圧が絡まった場所のメタファーへと変更されている。子供たちが「底なしの井戸」に落下しないようにと、母親が出入りを禁止した「屋根裏部屋」の秘密の場所に、娘は「父親たちのトラウマ記憶」が詰まった箱を発見する。アメリカの父親たちが受けた人種差別体験の怒りは、白人の雇用者やその妻に向けられるのではなく、本来ならば、その人種差別から守るべき、自らの家族へと転嫁されて発散されるので、ジェンダーとエスニシティの両方の抑圧が絡まった「屋根裏部屋」

は、往々にして、「ドメスティックな空間」のさらなる内部を、入れ子状に形成していく。

しかしながら、母親が自らと娘を守るために近づくことを禁止した「底なしの井戸(238)」は、『女武者』の最初の章における「叔母が身を投げた井戸」との空間的重ね書きでもあり、さらには、抑圧された父親たちの沈黙の声を探り出すための記憶の宝庫の場でもあった。

彼の戸棚や抽出しを探って、これは父という者の場所だな、父なる者がここにある、とわたしは思ったのだった。そのような彼の場所の一つは、土間敷の穴蔵だった。...穴蔵の戸はどうして錠をかけたままにしておくのかとたずねると、マーマは「井戸」があるからだと答えた。「あんたたちが井戸に落ちると困るからね」と彼女はいった。底なしだと。

ある日ぐると走ってみたら、穴蔵の戸が開いていた。...穴蔵へ入り、箱の影に隠れた。彼は底なしの井戸にかぶせてあった蓋を取った。父にさえぎる間も与えず、わたしは飛び出し、それを見てしまった--輝き膨れる黒い水を満たした穴、生き生きとして生き生きとして、瞳のように深く生き生きとして。...「気をつけるんだ」井戸のきわに、地面のへりに、世界の内側に通じる穴の縁に立つわたしに彼はいった。(335)

キングストンは、母から禁止されたにもかかわらず、その底なし沼への扉を開けて、父たちの「沈黙」や「怒り」へと転嫁されたフラストレーションの在処を発見する。

そこで、キングストンの身体性の書き直し戦略は、「曾祖父／祖父／父」たちの去勢化された位置を、家の地下の奥の奥としての「屋根裏的閉域」を表象すると同時に、その閉域を「地球に穴を空ける／穴に落ちる／穴を埋める」ジェスチャーとして、「叔母が身投げした井戸」との「重ね書き」的空間を、世界（地球）に向けて、投射的に再配備（remapping）し、可視化していくことである。そのジェスチャーによって、アメリカの鉄道建設に携わった祖父の労働力が、性的エネルギーも含め、いかに虚しく搾取されてきたかという史実が可視化されると同時に、アメリカの安価な労働力に奉仕させられた父たちの物語の対の物語としての「叔母の物語（中国に残され、家族のディアスポラの離散を強いられた状況で起こった悲劇）」をも可視化する。

カレン・カプランは、『移動の時代』において、帝国主義的膨張に伴う資本主義の発展と蓄積や、数々の不平等という歴史的遺産を免れえない、欧米の批評で使われている用語としての「旅」について、批判的に考察し、「合衆国内の人種、階級、ジェンダー上の優位にある者たちの特権を脱構築し、アイデンティティと連帯を表現し直す(11)」必要性を論じた。⁶「贅沢や暇にまかせた哲学的活動のポーズをとって表出する移動に関する欧米の言説は、差異を呑み込み、非歴史的な混合物を作り出すことになりがち」であるのに対して、＜中間航路＞の奴隷貿易、インディアン強制移住の＜涙の道＞、中国人移民の到来、日系アメリカ人の強制収容所送り、ホームレスたちの苦境などについての「旅や移動」の物語は、優勢な覇権言説から排除されてきたものの差異を前景化する。

その意味で、キングストンが『アメリカの中国人』に挿入した寓話の一つ「ロー・ブン・ソンの冒険」は、『ロビンソン・クルーソー』のもじりである。そのもじりにおいて、「クルーソー（主人）とフライディ（従者）の関係」は、「ロー・ブン・ソンとシン・ケイ・ンの関係」を反復しつつ、同時に、「ロー・ブン・ソン」とオリエンタルに「名づけられ直された‘renaming’」主体位置が、絶え間なく、クルーソーの位置から、フライディの位置への変換が行われる「プロセス」でもあることを、アイロニーを込めて語っている。中国系移民の旅のエクリチュール、そしてディアスポラ体験は、欧米の旅のエクリチュールが持ちうる特権的位置との消しがたい差異化のマークが刻まれているからである。レイラニ・ニシメが説明しているように、⁷西欧男性版文明化物語のマスター・ナラティヴがイデオロギー的に覆いをかけ、「超越的真理」のように振る舞う象徴産出力があるのに対して、オリエンタルに名づけ直された中国系男性の「冒険談」からは、真正な(authentic)西欧男性の権威(authority)は「剥奪」され、西欧伝統の神話力に与えられている「自然化」作用は失われ、その「去勢化」は、西欧男性冒険談を産出するディスコースの象徴的「穴」として形象化されていく。⁸

シエナネヴァダ山脈で、鉄道を敷くために山を「爆破」するアー・グーのアメリカ近代化のために捧げられた労働力は、キングストンの身体性の書き直し地図において、繰り返し、彼らの性欲の「爆破」と重ね書きされる。

おれは世界とファックしているんだ...世界の隆は大きかった、空のように大きかった、谷のように大きかった。くせになった。籠に入って下るたびに、血がペニスにどっと流れ、彼は世界とファックした。(188)

この場面における「地球をファックする」というアー・グーのファンタスティックなせりふは、『ロビンソン・クルーソー』物語に典型的な西欧男性中心的文明化言説、ことに、アメリカ建国の開拓譚・冒険譚にメタファー化されたジェンダー関係のミミックリである。モダニズム／モダニティの経験は、近代時間の男性化／空間の女性化（処女地）というジェンダー関係の象徴性の上に構築された。しかしクルーソーの位置からフライディの位置へと「去勢化」されたアー・グーのペニスを出すジェスチャーは、その男性エネルギーが空費されていくことしか示し得ない。ラカンの言う「ファルスを持つこと」の特権性から「ファルスである」位置へと格下げされた位置である。

トンネル工事のために、地球に穴を開けていたアー・グーは、夢を見るが、「その夢はただ落ちていく夢に他ならなかった。」「飛翔（近代化）」のつもりが「落下してしまうこと」⁹にすり替えられていくプロセスこそ、アメリカン・ドリームの「誘惑」にほだされ、旅人となって移動したチャイナメンが、アメリカという巨大マシーンを動かす安価な労働力として、組み込まれ、資本蓄積のメカニズムの巨大化し、肥大化して「自動装置」のように

動き出す「近代オートメーション機械」の「部品」としてロボット化されていったプロセスのことに他ならない。アー・グーは、このとき、自問自答する。

彼は自分のペニスを毛布の下で出してみたり、森の中で出してみたりしては、看護婦や王女のことを考えた。ただ眺めているだけのこともあった。いったいこれは何のためにあるんだ、いったい男とは何のためにいるんだ、いったい彼のペニスがなければならぬわけは何だ、と自問していたのだ。(204)¹⁰

祖父の空費されたエネルギーが詰まった「箱(穴)」を、しかしながら、孫娘は、オルターナティブな主体を再構築するためのリメモリーの場所として救い取ろうとする。

祖父たちはわたしたちや親しい友人がみやげに家に持ち帰るようと、馬糞を箱に詰めてくれた。麻布袋に詰めることもあった。よいにおいがした。(235)¹¹

祖父が「箱」に入れ、子孫のためにプレゼントした「馬糞」は、麻布袋に入れられて運ばれるが、孫娘には、いい匂いがすると感じられている。なぜなら、「馬糞」は、アメリカ主流文化が「汚いもの」として排除したもの、恥じの感覚によって自己卑下したもの、アブジェクトされてきたものを再意味化する記憶の象徴だからである。

< 2 > 科学の位置の脱構築

(1) 「野蛮人 'Wild Man' 」とは誰の名前か? — 「グリーンズワンプの沼男」の寓話から科学的言説を脱構築する「オルターナティブな夢」を発酵させる

「野蛮人 'Wild Man' 」のフィギュアは、「文明側 'civilization, civilizer' 」に対して、「文明／自然」「人間／野生」「理性／狂気」などの二項対立の図式のうち、第二項に置かれて、文明に対する外部として、発話の主体位置から棄却され、自らの声を奪われるような貶めが作用し続ける位置の形象化である。「グリーンズワンプの沼男」の寓話において「野蛮人」と名付けられたフィギュアは、「白人鬼」が「狂人」と名付けて「タンパ病院」に収容し、「医者」を見つけて、「薬」を与え、「治療」しようとするが、「ヒステリカル 'hysterical' (223)」になったあげく、格子にベルトを結わえつけ、それを首に巻いて、首つり自殺する。この寓話において、彼が自殺したときにベルトが「絡めた／絡まれた」「首」という身体部位は、タン・アオの寓話における「唇」「皮膚」「脚」「頭蓋」など、一つの寓話から別の寓話へスイッチされるにつれ、次々と身体の他の部位へと転位されて表象されていく。『ドラの症例』の序文を書いたチャールズ・バーンハイマーによれば、ヒステリーとは、何世紀にもわたって、ギリシア語の 'uterus' (子宮) という語源に拘束され、女の身体を持つものに特有の病気として、名づけられ、概念化されてきた。子宮は「動物的精神」であり、「気

紛れに」身体の部位を次から次ぎへと移動する「彷徨える子宮」と呼ばれた。¹²身体の悪い部位は、「医者」によって「正常」に戻るよう「治療」を受けるか、警察権力によって「牢屋」に入れられ「公正」するように監視される。この「彷徨える子宮」は、キングストンの戦略的ずらしによって、タン・アオという男性身体にまで転位し、「彼の子宮」と表象され直されている。

リサ・ロウは、『労働、移民、ジェンダー』において、資本蓄積のメカニズムは、いかに、「国」のボーダーを越境し、地球上を自由自在に飛び回って、利潤を求め、生き血を吸い取って、グローバル化していったかを説明している。¹³都合のいい安価な労働力を海外から調達しながら、初期の段階では、法的に排除し、二流市民の扱いをし続けて、先発の植民地主義が達成した「西欧優位主義」を、19世紀後半からの世紀転換期の短期間に「アメリカ優位主義」へと変換する。この短期間での達成は、アメリカが世界中の安価な労働力を吸収する「巨大な夢工房装置」として、「アメリカン・ドリーム」の「誘惑」を有効に機能させ続けることに成功した結果であったと言えよう。「均質化され、全体化され、単純化された普遍的主体（ナショナリズムの均一化言説）」は、規律化された従順な身体を造りだす「はず」であった。「科学。科学は万能だからな。(276)」という科学（医学）万能主義言説は、「野人‘Wild man’」を、文明側から飼いならされるべき「自然」、近代化言説の「理性」の側から統制されるべき「狂気」として、「規範化」の枠組みの外部へと追い払っていく。この文明化作用は、白人化‘whitewash’を唯一の正統なアメリカ性として洗脳‘brainwash’されていった中国系コミュニティの住人においてすら逃れがたい「予めの排除」のジェスチャーとして内面化されている。「文明側」に属さない「野蛮」として表象可能な領域から追い払うプロセスこそが、実は、モダンな交換価値へと一律に「ロボット化」させていくアメリカ化への同化変容物語のことに他ならない。歴史的ルーツの記憶は失われ、自らの自己努力による成功・失敗物語へと転化されて、近代的主体形成物語を全体化するプロセスの中に呑み込まれていく。

(2)「狂人」とは、誰の名前か？—狂人サオの物語から、アメリカン・ドリームの誘惑を脱構築する

しかしながら、世界の飢饉に終止符を打つ狂人サオの夢を語る声が「ヒステリカル(223)」な騒音にしか聞こえないとすれば、その声の聞き手としてのコミュニティこそが、アメリカ的な資本主義社会の価値観に同化してしまっているとは言えないだろうか。

「やつらは白い食品に毒を盛るんだ--玉子、パン、牛乳、バニラアイスクリーム、小麦粉、砂糖、白うずら豆。白い食品のうわべの純粋さがわたしをたぶらかすだろう、それなら毒もわからないだろうと考えているんだな、だがおれは、やつらが透明な溶解性の毒を開発したことを知ってるんだからな。毎日違う店で買物することにしよう。次々に違う店へ行

くことにするのさ」(276)

ここで、狂人サオが「白い食品」の比喻で語っていることは、美女に誘惑された「タン・アオの物語」や「死霊の愛」での「歓待」のプロセスが「毒」を含んでいたことを暴き、アメリカン・ドリームの誘惑を脱構築しようとするものである。その「幻滅」に必要なことは、「麦芽 wheat germ」を「食べて」「共産主義」を発酵させることであると狂人サオは語る。狂人サオのオールターナティブな夢は、アメリカ人になることでも、中国人になることでもなく、国境というボーダーを越えた世界平和を構築することである。

「中国だけじゃない」と彼はいった、「アメリカだけでもないんだ。世界だ。全世界を組織するのだ。世界の飢饉に終止符を打つ。そこで世界平和がやってくる」(275)

そんな狂人サオの「もう一つのアмерикан・ドリーム」を、コミュニティの価値観を内面化した母は、まともに扱わず、「気狂い」の戯れ言として切り捨てる。

気が狂ってしまったね」とわたしの母は診断した。「ますます悪化してるよ。家にきても、わたしたちが店に行っている場合はね、おまえたち、おじさんを家にいれちゃいけないよ
あいつらがおれを狙っているのはなぜかといえば、--」と、彼は「なぜかといえば」という言葉で息を止めて--「おれが共産主義者だからさ」といった。「FBI だ」と囁く。「秘密警察だ。『非米活動調査委員会』だ。椰子の実だ。殻の中だってな。あいつらはその科学技術を利用して、椰子の実の中へ入りこむことだってできるようになった」

「あれの頭こそ椰子の実だ」とバーバはいった。

しかしながら、思想的チェックを受けて、「気狂い」扱いされる共産主義者サオの「狂気」は、キングストンの語り直しにおいて、「半人半獣」と「半男半女」のフィギュアへとファンタスティックに融合され、性差別と人種差別が複雑に絡み合う「混交性」を顕在化させるものである。

「経営者にはハリーという名の黒人の下男もいた。噂では、彼は半男／半女、男女両性具有者ということだった。(343)」

しかし、父と母の会話の中においてさえ「共産主義者＝気狂い」として排除され続ける位置、そして、「半男／半女」と表象される「黒人奴隷」の位置こそ、実は、アメリカの急速な近代化のために必要な労働力として内部に包摂されながら、内部の外部として第二級の市民扱いをされてきたマイノリティ集団のことでもあり、チャイナ・タウンのストック

トンにおいて、貧困層を形成する自らのアブジェクト・フィギュアのことである。

(3) ミクロの「身体」／マクロの「国体」の重ね書き

キングストンによる「半神半人のトリックスター」の語り口は、この「半人前の猿」「半男／半女」という混交的な表象を再利用していく。「子宮を持つ彼」の位置に貶められた身体性は、このとき、中国系を含めたマイノリティ集団が「一人前の男性性」を獲得し損なう「移動（旅）のエクリチュール」として、ジェンダー／セクシュアリティを前景化しつつ、書き直されていく。衣装コードとしてのジェンダーは、簡単に着替えることが可能であるが、もっと深いレベルでの身体は、容易に交換することはできない。しかし、キングストンによる「身体性の語り直し」は、一人の人間の現実レベルのタイム・スパンを超え、ミクロの「身体」とマクロの「国体」のファンタスティックな重ね書き的空間を織り込んでいく。

「扉さながらの膺から、彼は彼女のからだに入ってしまった。…そして、まず足から出ようとしているところを、一羽の鳥が見て、膺から彼の脚がくねくねと出てくる光景がおかしいと笑った。(174)」

この「半神半人のトリックスターの語り口」において、「膺」というミクロレベルの「女の身体」への入り口の部位は、マクロレベルの「アメリカの国体（国境）」への入り口と重ね書きされている。「彼女のからだ」に入ってしまった「彼」は、現実レベルでは、彼の身体全体ではあり得ず、部分（ペニス）を指し、「膺」から出てくる「彼」は、「そのペニスの持ち主（＝父）」ではなくて、その持ち主から生を授かった息子」である。ここに父と息子の二世帯を跨ぐ時間性が示され、さらに「膺」という「女の身体」への入口は、「アメリカ」への入口と重ね合わせることによって、空間化されてもいる。しかもこの場合、アメリカへの入国で、「去勢」されてきた移民の父たちのトラウマは、女の身体を経由することによって癒され、新たに生まれ変わる物語として表象され直されているのである。

とすれば、「タン・アオの子宮」とは、中国系のエスニック集団においてさえ失われていく被抑圧の記憶を再記憶するために、キングストンによって意図的に仕掛けられた<誤表象>であると解釈できるのではないだろうか。キングストン自身によって「女の物語」と「男の物語」に切り離された中国系アメリカ人の歴史は、双方を参照的に読むことによって、もう一度パリンプセスト的に呼応しあい、時空間を超えて重なり合う。「去勢化」によって人種差別を完膚なきまでに押しつけられる『アメリカの中国人』の男たちの物語と深い井戸に身を投げざるをえなかった『女武者』の叔母の物語は、「合わせ鏡」のような複合的な差別構造を映し出しているからである。しかし、双方の物語が相互参照的に読まれ直される時、男たちの絶望の物語……その象徴であるかのような、大地に向けて「空しく」

放出される性的エネルギー……は、逆に「大地との交接」という隠喩的現実を身に帯びるものとなる。それは、井戸という暗く深い地球の奥底に我が身を投じることで、自分自身の誇りを守ったく女>の陰画でもある。同時にそれは、性的に「冒瀆的」な女たちの物語を公的には禁じつつ、私的には（しかし留保を重ねて）伝達していく母や祖母たち、そしてその話を恐れつつも魅入られながら聞く娘たちの物語にも繋がっていく。

<3> アメリカ的男性性の脱構築—ベトナム戦争に行った弟の話

「法」の「正義」の位置と近代化言説における「科学」の位置をパロディー化し、そのような「アメリカ的男性性」の模倣が孕むことになる矛盾（自己矛盾も含めて）を、最も痛烈に暴くことになるのは、ベトナム戦争に行った弟の話の語り口をとおしてである。

(1) <戦争のような日常／日常のような戦争>

「男性化(masculinization)」と「軍事化(militarization)」が、「保護する者（＝男性らしさ）」と「保護される者（＝女性化）」のジェンダー化された関係を「自然化」するレトリックの正当化によって構築されていることに、警告を発したのは、シンシア・エンローである。14『フェミニズムで探る軍事化と国際政治』において、エンローは、「国家の保護者を自認する人々」によって、世界が危険な場所として描かれ、人為的で不平等な「保護者／被保護者」の関係の正当化がいかに保たれているかを批判的に分析した。「軍事化された男らしさ」を崇拜する「軍人の妻」の心性の構築に手を貸すのではなく、国家安全保障の「脱男性化」と「脱軍事化」のために有用なフェミニストの議論を再構築していく必要を主張したのである。

キングストンは、『アメリカの中国人』の終盤にベトナム戦争に行った弟の話の配置し、映画館で映像を見る経験と重ね書きすることで、「戦争（＝非常時）／平和（＝日常）」という二分法で把握されがちな認識方法をフェミニスト的に脱構築しようとしている。

にわかには、夢のごとく誰もいなくなり、わたしは往来で泣いていた。その後ずっとたって、あれは映画だった、戦争映画、古いセピア色の映画だったと思いあたった。(369)

資本主義経済システムにおいて、「非常時体制」とは、仮想敵国をつくりだすことによって、冷戦構造という二分法的な世界認識が構築され、「日常の軍事化／軍事の日常化」が正当化されていくとすれば、キングストンは、ベトナム戦争に行った弟の参戦意識の合理化を描くにあたって、「軍人」と「市民」の二分法を戦略的に曖昧化していく。「戦争経済を基盤にしている国にあっては、“海軍にいること(being in the Navy)”と“市民であること(being a civilian)”の間には、大した相違がない(398)」と。軍隊に入った弟の戦争体験は、日常の延長として、「食事」や「排泄」の描写が延々と描かれ、究極的に、「食事」と「排泄」

用の容器のボーダーも曖昧化されていく。「彼らは金属小便器を洗う時に使う時のそれと同じ容器でチリソースを食べていた(401)」と。「軍事／日常」の二分法を解体して、弟の軍隊入隊体験を日常化するキングストンは、ベトナム爆撃の最もシリアスな場面さえも、現実に人を殺しているという実感をともなうことなく、日常の延長であるかのように、淡々と描写していく。

彼は飛行機から落ちる爆弾を見ることはなかった。...詰めて固定する積み込みの時には、それはきれいに巻いたマリファナみたいだったし、長い粒の米みたいだったし、蛹やうんこみたいでもあった。爆撃の下方に泣き声を聞くこともなかった。...パイロットたちはそっちへ飛んで行っては、割り当て分を落として戻ってきた。アメリカ軍が行った最大の爆撃の最中にあるベトナムにげんにいるのだということを理解するには、知性と想像力が必要だった。(417)

テクノロジーを駆使した近代戦争において、戦争の現実を知るには「イメージーション」が必要であり、現実感覚を麻痺させた弟の戦争体験は、夢の中か、映画の映像であるかのように通り過ぎていってしまう。「戦争／平和」の二分法は、このように、「戦争のような日常／日常のような戦争」として、ボーダーが曖昧化され、「映像のような戦争」のリアル感のなさが、現実の暴力に覆いをかけていく近代戦争に対する痛烈な皮肉が込められていく。

アメリカ的男性性のコードを着て、アメリカ化された靴を履き、アメリカのユニフォームを身に纏って、スマートに近代化した身体として生まれ変わろうとした男たちが究極的に行き着いた先は、アメリカの軍服をユニフォームとして身にまとい、まるで、ルーツへの旅（帰郷）のようにアジアを敵とする戦争を体験することであった。

彼はまた汽車に乗り、親戚が住んでいる通りを探しに町へ戻った。買い物をしながら、長い年月のあとに会う折にふさわしいみやげは何だろうかと思いつき出した。(424)

「みやげ」を探して「買い物」をする弟の戦争体験は、故郷への里帰りのような懐かしさを込めて描かれ、「敵／味方」を明確に区分して戦わせようとする二分法の不可能性が露呈されていく。

船がアジアに近づくにしがって、彼はさかんに夢を見るようになった。...これは夢か映画に違いない、と彼は思うのだが、瞬いてもその光景は消えない。..彼は歯をくいしばり、狂乱状態となり、手当たりしだいに人間の肉ならすべてを切りつけた。その手を休めて、彼は犠牲者にも切りつけてしまったことに気がつくのだ。彼自身の親戚の者たちだ。

数珠つなぎになっている人々の顔は、彼の家族のそれである。中国人の顔、中国人の眼、鼻、そして頬骨。(408)

「自らの親戚への戦争」「自らの家族への戦争」。夢か映画の中でしか起こってはならないはずのことは、しかし、弟が、リアリティ感を欠如させながら体験したベトナム戦争の現実であった。

(2)「敵(外部)／味方(内部)」の二項対立のトリックを暴く—アイデンティティ・ポリティックスの問題として

キングストンが『女武者』で描いた「闘う女」のモデルであるファ・ムーランは、中国版のジャンヌ・ダルクである。しかし、「女性化する男」と「男性化する女」というトランス・ジェンダーの二つのモデルは、単純な「交換」にはなりえず、そこに根深い非対称性が孕まれている。原型となった民話やディズニー映画でリメイクされたムーランは前の戦争で足を痛めた老齢の父の身代わりとなって、男になりすまし戦場に出かけていく。しかしながら「徴兵制」は、「国家」によって(男の)市民権の大前提とされてきた「歴史」を有している。その前提に変更がない限り、親孝行なムーランのジェンダー・スイッチのジェスチャーも、「男の闘いの論理」の模倣となり、ムーランの「男性化」は「国家」のために利用されるだけになってしまう。しかも「雄々しい女」の戦場での活躍には、男性英雄であれば与えられる褒美や名誉もなく、「非常時」が終われば、妻として母としての役割の重要性を説く近代ジェンダー化物語へと再回収されていく。そもそも国難を救ったジャンヌ・ダルクは、異端として火刑に処せられ、「歴史」から排除された「魔女」の原型であり、この図式においては、「男性化する女」のトランス・ジェンダー的凛々しさも、「非常時」には好ましい属性として軍事的に利用されつつも、「非常時」だけの例外として処理され、家庭と再生産(生殖)を「女」の「本来」の領域とするシステムは温存されたままとなる。なぜなら「徴兵制」を内包した「近代国家の市民権」は、国家のために闘う権利と義務を「男」のものとして領域化し、「男並み化」して闘えない／闘わない「女」の権利を剥奪してきたからである。こうしたジェンダー化物語に対してむしろ問い直されるべきは、市民権の前提として「軍事化された男の闘いを正当化する」国家組織それ自体であるべきだ。

それに対して、キングストンが『女武者』に登場させた「闘う女」は、軍事化された男の闘いの領域」の前線に立たされた原型ファ・ムーランとは異なり、女への「不正」を見過ごせないヒロインである。「金山」に出かけた夫の留守中に身ごもり、村人たちに襲撃されて井戸に身投げをし、生まれてこなかったも同然の扱いをされて、語ることも禁止されたという「叔母の話」を聞かされて、彼女が向かった先は山の中である。そこに住む仙人のような老夫婦から、彼女は15年にわたる「見え方」の変容のための修行をつんでい

く。近代化において孕まれた価値観を「学び捨て去る‘unlearn’(Spivak)」訓練の過程で彼女の背中に掘られた「報復」の文字は、自らの身体に「刷り込まれていた」意味づけを「再意味化」しようとする闘いの指標である。このときヒロインが学び直すのは、女に一方的に課された「正しいセクシュアリティ」という家父長制の性規範を「透視」する力である。

「叔母の話」には、女のセクシュアリティと再生産能力を父系家族内に限定し、それに違反した者を「魔女」として葬り去ろうとする抑圧的権力が刻まれている。とすれば、ヒロインの「透視」力とは、その「不正」に抗し、女の身体を自ら定義し直そうとする力である。母のトークストーリーによって、「可視化」された叔母の身投げした井戸の場所は、太平洋を超え、娘の語りへと接続されながら、女への「不正」を正す「日常」の闘いが向けられるべき身体を象徴的に示していくことになる。

このように、『女武者』における「女の闘い」の指標が指し示すレファレントは、『アメリカの中国人』における「ベトナム戦争に行った弟の闘い」が指し示すものとは、あまりにも大きくかけ離れている。「闘い」が指し示すレファレントのジェンダー格差を、近代国家の「市民権」としての戦争要員が誰であったかという現実レベルの問題として問い直すことは、「2001.9.11」のテロ事件以降、重要課題として、再浮上してきている。上野千鶴子は、近代国家における市民の権利と義務の双務性を再考し、国家のお墨付きを得て振るわれる戦争という暴力と家庭内暴力のジェンダー関係を再編しようとした。¹⁵上野によれば、徴兵制を男性の義務と同時に権利として規定してきた歴史は、退役軍人に、公的福祉の支出や、公務員への優先採用などの様々な市民的特権を用意し、その特権の享受者を男性のものとすることに貢献してきたのである。このような「市民権」の成り立ちにおけるジェンダー格差を視野に入れるときに、問われるべきことは、女が男性を範型とした市民権を無批判に手に入れようとして男性化し、女も参戦することではなく、男性を範型とした市民権の内容の前提自体に疑義を差し挟むことであろう。

このことは、ジェンダー格差だけでなく、エスニシティ格差においても同様に、問い直されるべきものである。

イザベラ・ファースは、戦争という局面において、ハイフン付きのアメリカ人に課せられた二項対立のトリックを次のように説明している。

結合させると同時に分離させる印としてのハイフンは、多元文化主義的理論における中心的なトロープである。ハイフンは、アジア系移民には、個人として、頑強に付着し続ける。大部分のヨーロッパ系移民にとって、一世代で消え落ちるものである一方で、ハイフンは、他者性の印として、アジア系統の市民には残存し続ける。¹⁶

「排他的包摂‘an exclusionary inclusion’」（印づけられた商品としてのみ承認される）か、「包摂的排除‘an inclusionary exclusion’」（自らの特殊性を抑圧し、「主流」から区別

がつかなくなることによって「価値あるもの」とみなされる場合にのみ承認される) かの二項対立的な選択を、歴史的に、アイデンティティ・レベルで迫られてきたハイフン付きアメリカ人は、戦争という局面において、再び「アメリカ人としてのナショナル・アイデンティティの純粋性」を証明する義務を負った。しかしながら、「中国系アメリカ人」は、「中国人」なのか「アメリカ人」なのか? 「敵/味方」が純粋な二項であるかのような虚構を対立的に構築し、暴力を振るい合うことを強いる戦争は、ハイフン付きで呼ばれ続けるアメリカ人に、不可能な純粋性を要求している。近代戦争において、「アメリカ人」であることの証明、あるいは、アメリカの軍服をユニフォームとして身にまとい戦争に従軍することが、アメリカの男性性証明として試されたのであるとすれば、キングストンは、その男性性の証明としての権利であり、義務である従軍という任務から予め排除された女の位置から、アイデンティティ・ポリティックスの内部矛盾として戦争を表象し直しているのである。

「アメリカという国体」の「内側 (=「我々」味方)」にも「外側 (=「彼ら」敵) にも、カテゴリーとして完璧に二分されない自らの「内」なる多様性、雑種性、混交性を背負ったハイフン付きのアメリカ人は、二項対立的なアイデンティティ・ポリティックス自体が、二項対立的枠組みの罫であることに気づく位置にいる。「内」なるハイブリディティを排除して、自らが純粋で均一であるかのように、対抗的にアイデンティティを構築しようとする自体が、その枠組みの罫にはまっていくことだからである。エスニック集団の「内」なるハイブリディティは、家父長制システム内部の構造的他者として「予めの排除」を受け続けてきた「女」のジェンダー位置から、その記号の全体を示すことの不可能性を、より明白に示すことになる。

繰り返せば、キングストンの描いた「女の物語」は、本物の戦場で、華々しく武力を行使して大量殺戮を繰り返す女武者の物語ではなく、レイシズムとセクシズムに満ちた日常の暴力に対する草の根の「闘い」の物語であり、民衆による「下からの闘い」の物語である。それは、性差別であれ、人種差別であれ、そのシステムを再強化しようとする「敵」との「闘い」であると同時に、自らの内側に刷り込まれていくイデオロギーの身体化と絶えず闘うことを意味する。

思えば、「ファルスをもつ」特権的位置から「ファルスである」従属的位置への格下げを表明していたにすぎない祖父の台詞「地球をファックする」や、ペニスを出すというジェスチャーは、性差別と人種差別の複合作用によって他者を構築するシステムに対する「闘い」を、そのなかにしまい込んでいるものとも読める。とすれば、地球「そのもの」との交接というイメージは、国境という恣意的境界によってナショナル・アイデンティティを構築する近代国家への意義申し立てとなり、また「地球市民」へと生まれ変わろうとするキングストンのグローバル・メッセージにもなる。「半人前に格下げされ続ける猿」や「半男/半女」の特殊性のマーキング位置から、アメリカの多様性をハイブリッドに意味付け直

す「闘い」こそが、ヘゲモニーに向かって、対抗勢力を結集させていくことになるのであろう。キングストンは、国家間で争われるの近代戦争の国境というボーダーの「外側／内側」という二分法をパロディー化し、アメリカの国体の内側から展開される戦いを「ゴリラ戦」と呼んでいる。

「戦争になって、ゴリラ戦のために地下に潜る時も、ここに隠れることになっていた。(358)

「ベトナム戦争」で、アメリカの国体の外側に赴き、自らの顔と似た「敵」を発見して、「敵／味方」の二分法が崩れていく悪夢にうなされた弟のアメリカ化物語とは対照的に、ゴリラ戦は、「半／半」の位置に置かれてきたものが結集して、対抗勢力を再形成していこうとする、アメリカの内側からの日常における「闘い」である。主流文化によって刷り込まれていく「洗脳」から、自らが置かれた位置を相対化することによって、生まれ変わるプロセスは、「中国の父たちの物語」と「母と娘の物語」が、それぞれ相互に交渉し合うことで可能になるであろう。

で、おじさん、あなたのセーターの裾のところでばたついている鶏の足、これはどうしたわけですか？(359)

「チキン」と名指されることへの脅威や去勢化されることへの不安が、中国の父たちに、アメリカ的男性性を模倣することを強いてきたのであるとすれば、そのような男性モデルの市民権という前提自体を疑う「勇気」を持つように「誘い直すこと」。そのような対話的な関係を築き直すことこそが、主流文化から周辺化された「曾祖父／祖父／父／弟」の物語をジェンダー化／性化（セクシュアライズ）することで、可視化しようとしたキングストンのトリックスターの語り口なのではあるまいか。

*本稿は、2005年5月14日、名古屋大学において開催された、アジア系アメリカ文学会月例会において、口頭発表した論旨をもとに加筆修正したものである。なお、本稿とその対の物語である『チャイナタウンの女武者』論の骨子は、『英語青年』（2005.11）に掲載させていただいた。

Maxine Hong Kingston, *The Woman Warrior* (New York: Vintage International, 1975). 邦訳、藤本和子『チャイナタウンの女武者』（晶文社）

_____, *China Men* (New York: Vintage International, 1977) 邦訳、藤本和子『アメリカの中国人』（晶文社）

_____, *Tripmaster Monkey* (New York: Vintage International, 1987)

<注>

1. 「猿のフィギュア」は、「エスニシティ」／「ジェンダー／セクシュアリティ」を混交して再記号化していくキングストンの語りの戦略の重要なトロープ作用の容れ物でもある。『女武者』において、レイピストの否定的な形象として頻出する「ジェンダー／セクシュアリティ」の表象は、『アメリカの中国人』において、エスニシティのカテゴリーと混交されることによって、その否定性の契機が旋回され、投射的に、肯定的なものへと‘remapping’されて、再記号化を促していつていると思われる。キングストンは、インタビューで、「猿のフィギュア」について、次のように述べている。

Seshachari: I noticed too that at the time you were writing your *Tripmaster Monkey*, Henry Louis Gates, Jr. Was writing his *The Signifying Monkey*.

Kingston: I know, I know. See, so the Monkey was here, and it went inside Henry Louis Gates’s mind, and it went inside my mind too.

Seshachari: And he takes it as a kind of trope. He calls it a peculiarly African American rhetorical trope. How would you signify your monkey?

Kingston: I love it whenever I find [something] like the African American Monkey and Chinese Monkey--when I find out that they are both monkeys and they are both here in America, then I feel connected to African American people and again inspired that we are all one human race. I think it’s so important for us to find figures like that, so that we can make our human connections. My monkey signifies the way the natural mind and body work- jumping around, undisciplined. Buddhists say “monkey mind” and “horse willpower.” in *Conversations with Maxine Hong Kingston*, (eds.) Paul Skenazy and Tera Martin, (Jackson: U. P. Of Mississippi, 1998), p. 206.

2. Homi K. Bhabhaは、「猿のフィギュア」について、人間と似ているが、完璧な人間には「成り損なっている」ものとして、「アイロニー・模倣・反復」の概念を用いて説明している。それは、似ているが違う「反復と差異(Repetition and revision)」に特徴づけられる。「この半人間の猿のフィギュア」は、キングストンの語りにおいて、「半男・半女」のジェンダー的混交性と掛け合わされて、表象され直されている。< the civilizing mission, ‘human and not wholly human’--irony, mimicry and repetition. In this comic turn from the high ideals of the colonial imagination to its low mimetic literary effects mimicry emerges as one of the most elusive and effective strategies of colonial power and knowledge.> *The Location of Culture* (London and New York: Routledge, 1994), “Of Mimicry and Man,” p. 86.

3. 和泉邦子、「グローバリゼーションの文脈における中国系移民文学の“Emasculation/Domestication”表象—*The Woman Warrior*における内枠／外枠物語」『金沢大学文学部論集 言語・文学篇』第25号、pp. 45-66.

4. ショシャーナ・フェルマン、立川健二訳、『語る身体のスキャンダル』（勁草書房）

「事実確認的(constative)」と「行為遂行的(performative)」とに区分したオースティンの発話カテゴリーを応用して、フェルマンは、ドン・ジュアンの誘惑のレトリックをパフォーマティヴと分析する。

彼の（結婚の）約束の破棄は、認識レベルで起こるのではなく、「運／不運」、ないしは、「成功／失敗」として形容されるものである。アメリカン・ドリームの誘惑をラブ・ロマンスとして、ジェンダー化／性化（セクシュアライズ）したキングストンの書き直しにおいても、アメリカン・ドリームの約束はパフォーマティブに演じられている。行為遂行能力は、事実確認的なカテゴリーとは異なり、「運／不運」や「成功／失敗」の問題である。

5. Sandra M. Gilbert and Susan Gubar, *The Madwoman in the Attic* (New Haven and London: Yale U. P., 1979) 以来、「屋根裏部屋」は家庭領域への空間的閉じ込めのメタファーとして、ジェンダー分析の有用な道具であった。しかし、白人フェミニストと植民地主義言説との絡みが、どのように表象されていくかについては、さらに慎重な分析が必要とされる。

6. カレン・カプラン、村山淳彦訳、『移動の時代』（未来社）

7. Leilani Nishime, "Engendering Genre: Gender and Nationalism in *China Men* and *The Woman Warrior*," in *Critical Essays on Maxine Hong Kingston*, ed. Laura E. Skandera-Trombley (New York: G. K. Hall & Co., 1998), pp. 261-275.

8. 竹村和子、「親族関係のブラック／ホワイトホール—『アブサロム、アブサロム』を乱交的に読む』『フォークナー』第4号、(2002) pp. 40-53. (松柏社)

9. 小林憲二、『アメリカ文化のいま：人種・ジェンダー・階級』（ミネルヴァ書房）pp. 255-270.

10. 「ペニスを出す」というジェスチャーは、トニ・モリスンの『ソロモンの歌』に登場するフレディの仕種としても表象されている。モリスンが黒人の男性性を問い直しているこの作品においても、「ペニスを出す」というジェスチャーは、「去勢化」（ファルスである位置）の表象であると思われる。

11. 時間軸を書き込んでいると思われるこの場面は、モリスンの『ジャズ』に登場するワイルドとゴールデン・グレイの出会いの場面と酷似している。モリスンは、人々から貶められる真っ黒な母ワイルドの出産場面の目撃者となることをゴールデン・グレイに強制し、混血に生まれ、美しいと賞賛される主体位置の修正を迫っている。二人が乗る「真っ黒な馬車」は、キングストンのエスニシティ表象においても、「猿」「馬」「チキン」などとなって、少しずつ時間軸を「ずらし」ながら、再意味化を行う記号となっている。

12. Charles Bernheimer and Claire Kahane (eds.) *In Dora's Case: Freud-Hysteria-Feminism* (Columbia U. P., 1985), p. 2.

13. Lisa Lowe, *Immigrant Acts* (Durham and London: Duke U. P., 1996)

14. シンシア・エンロー、秋葉こずえ訳、『フェミニズムで探る軍事化と国際政治』（御茶の水書房）

15. 上野千鶴子、「市民権とジェンダー：公私の領域の解体と再編」、『思想』no. 955. (2003. 11)

16. Isabella Furth, "Bee-eeen! Nation, Transformation, and the Hyphen of Ethnicity in Kingston's *Tripmaster Monkey*," in *Critical Essays on Maxine Hong Kingston*, pp. 304-305.